
Creation of Origin ～**幻想たる魂**～

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Creation of Origin 〈幻想たる魂〉

【Nコード】

N2305Z

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

2112年。オンラインゲームも過去と比べかなり進歩し、殆どがVRとなっていた。

その中でも、特に人気なのが、運営会社【ワールドクリエイト?】が造ったVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームだった。その理由は、基本プレイは無料だが月500円で【ワールドクリエイト?】から自分専用のサーバーを準備してもらい、そのサーバーに【ワールドクリエイト?】が提供するオブジェクトを配置していき世界を創造することが出来る上に、フ

レンドと一緒にその舞台を冒険できる為だ。更に、自らクエストを作る事も可能である。

そんな、大人気オンラインゲームを駿河浩司は春日繁人から誘われプレイを始めるのだった。

第1話

2112年4月27日。駿河浩司^{すまがこうじ}は、ベッド、勉強机、クローゼット、そして卵形のVRシステム『エッグ』のある自分の部屋で、ワクワクとした表情で、横に設置されている『エッグ』を見ていた。今、浩司は『エッグ』にVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームをインストールしている最中である。

【Creation of Origin】とは、今世界で一番ユーザー数の多いゲームと言われている。その理由は、基本プレイは無料なのだが、運営会社『ワールドクリエイト?』に月額500円という安さで自分専用のサーバーを用意して貰い、そのサーバーに『ワールドクリエイト?』が用意しているオブジェクトを使って、世界を創り、創った世界で冒険をする事が出来るのである。もちろん、他のユーザーもだ。

更に、自らクエストを創る事が出来るのである。ただ、残念ながら自ら創ったクエストには参加できないため、友達と一緒にそのクエストを楽しむことは出来ないらしい。ここは、少し残念な気持ちになる。

しかしだ。このインストールさえ終われば、無限の世界が広がっていると思うと浩司は、気持ち着急いてくる。まだか、と思い『エッグ』と繋がっている勉強机の上に置かれているデスクトップパソコンを見る。

その画面の中央には、小さなウィンドウが表示されておりそこには、【Creation of Origin】インストール中! 90%完了! 後約1分と表示されていた。

あゝ、早く終われ! と願いつつも浩司は携帯を取り出し、このゲームをやるきっかけを作ってくれた友達にメールを送る。

——シゲ、後1分でインストール終わる。

というメールをシゲ。春日繁人^{かすが しげと}という名前の高校に入ってから出来た友達に送った。

メールを送って、インストールが完了したというメッセージが表示されて直ぐに浩司の携帯に、受信を報せる音楽が流れる。

——りょーかい！ 俺は、もう入ってるから、ヴェスナーってキャラが俺なんだけど、入ったらヴェスナーにメッセ送ってくれ！

浩司は、内容を確認すると携帯を机の上に置き『エッグ』の中へと入る。『エッグ』の中は、淡く青白く照らされてベッドが置かれている。浩司は、ベッドの上に置かれている目まで隠すヘッドセットを手に取り頭に被る。そして、被った状態のままベッドに仰向けになる。

すると、浩司の視線には様々なVRに対応しているソフトの一覧が表示される。そして、先程インストールしたばかりの「Creation of Origin」のマーク。正面を向いたローブを被った人間が、下にある小さな地球だろうか？ 青い球体に、両手を添えるようなマークがあった。何だか、ゲームタイトルとイメージ違うな〜と思いつつもゲームを起動させる。

「クリエイションオブオリジン、起動！」

浩司は、音声起動によりゲームを起動させた。すると、突然視界が暗くなり浩司の体の感覚が、死んでいくように無くなっていく。……いや、死んだ事無いから判らんけどな？

5秒ぐらい経つと、浩司の視界が元に戻る。しかし、そこに映っているのは、先程のVR対応ソフトの一覧表示ではなく、円形で、中

中央に黄金に輝く椅子がありそこには、白くなったひげをかなり、たぶん10センチぐらい伸ばしている茶色いローブを着た爺さんが座っていた。そして、この場所は空にでも浮いているのかやたらと空に近い。

浩司は、とりあえず無事にゲームの中に入ったと認識する。そして、自分の姿を見ようと思い、顔を下に向ける。そこには、素肌が表示されていた……何てことは無かった。体全体を見る。どうやら、椅子に座っている爺さんと色が違って白いローブを着ていた様だった。とりあえず、どうすれば分からないが、爺さんに近づけば何か起こるだろうと考え爺さんに近づいていく。

「汝、名は？」

爺さんと、後4・5歩の所まで近づくと突然そんな問い掛けが爺さんの口から聞こえてきた。浩司は、まさかそんな問い掛けが急にされるとは思ってなかったため咄嗟に、

「浩司」

と言いそうになったが留まる。

俺は、ゲームを起動させてこの空間にやってきた。ならば、此処はゲームの世界だろ？ なら、その世界で名前を問われるという事はキャラの名前を決める場面じゃないか！ あぶねえ、あぶねえ。

名前か。何が良いだろと考える。この世界で何がやりたいのか浩司は思い出す。もちろん、冒険だろ。それに、魔物との戦闘^{モンスター}。それに色んな人と接触するんだ。色んな事を見聞きして成長したい。成長……成長か。

英語で成長は、グロウス。他は……確かフランス語で、クロワサンス。イタリア語で、クレシタだったはず。ネーミング辞典って本にそう載っていた気がする。

「グロウス」

浩司は、爺さんに向かってそう答える。すると、爺さんが、ビクツと肩を揺らす。そのまま30秒ぐらいか待って、漸く爺さんの口が開いた。

「グロウス。ふむ、良い名じゃ」

浩司、グロウスは内心その言葉に安心する。どうやら、他の誰かと被っていなかったみたいだ。被っていると、また考え直さなければいけないからめんどくさいんだよな。何故か、自分が使う名前の時はやたらと被ってしまう時があるんだよなと嫌な事を思い出してしまった。

グロウスは、それを振り払う様に頭を振った。

「わしは、ゼウス。また、会うときがあるう。それまで、頑張るが良い」

爺さんと名乗った名前に、ゼウス！？と驚いているとゼウスが手を振り出した。そして、グロウスの体の周りに光が現れる。その光が現れると、またもや体の感覚が下から無くなっていく。

その何ともいえない感覚に、顔を顰めていると全ての感覚が途切れ視界が暗闇に染まる。暗闇に染まったと思った瞬間には、視界が景色を映し体の感覚が上半身から戻っていく。

VRのオンラインゲームは初めてだから、この部分的に感覚が無くなっていくのはもちろん初めてで何か気持ち悪いな……。

そんな事を思いつつ、グロウスは周りの景色を見渡す。

そこは、昔の時代に戻ったような景色が広がっていた。レンガとかで家が建てられていると思うていたグロウスは、目の前に広がる竪穴式住居に驚かされる。もうこれは、村というより集落と表現した

方が正しい気がする。

何だか、場違いな場所に來た気がして早くシゲじゃなかった。確か、ヴェスナーだったな。にメッセージを送ろうと思い、ウィンドウを表示させようとする。確か、空中を右手で左から右に滑らすんだっ
たか？

と、少し自信無さ気に滑らせる。すると、合っていた様で右手を滑らせた辺りにウィンドウが表示される。そのウィンドウには、

ステータス——恐らく、今の自分の強さなどが分かるんだろう。

アタックスキルポイント

スキル——確か、ASPを割り振って覚えたり、レベルを上げたりするスキルと、そのスキルに該当する行動を取れば熟練度が溜まっていきレベルが上がるスキルの一覧が見れるんだろう。

アイテム——その名の通り、持っているアイテムが見れるんだろうな。

メッセージ——お、有った！ 後で、送ろう。

ログアウト——もちろん、ゲームから抜けるための機能だな。

一通り、ウィンドウに表示されたコマンド見ると目的であったメッセージのコマンドの辺りに指を突き刺す。すると、メッセージ機能が起動し左側の小さなボックスには、宛名。それさえ、入力終われば後は送る言葉を言えばその相手に送れるはずだ。うん、現実ならばから見れば変な人と思われそうだな。ゲームで良かった。という訳で、シゲこと、ヴェスナーにメッセージを飛ばそう。

ヴェスナー——おい、俺やけど。今すぐ来れそう？

メッセージを飛ばす。無事に送れたのか気になってしまい待っている間、うーんと唸ってしまう。しかし、30秒も経たない内に返事が來た。

>ヴェスナー——グロウスって名前にしたんだな。ちょっと待つて
る。今向かうから。

そのメッセージを確認し、グロウスは座って待つ事にした。とりあ
えず、ヴェスナーが来るまで暇だから、よく見ていなかった周りを見
渡す。

やはり、最初の場所のためか見渡してもいるのは自分と同じ白い口
ーブを被ったプレイヤーが多い。それ以外には、1人だけやたらと
派手な黄金に輝く兜に鎧を着ているプレイヤーがいたが、俺
と同じ、始めたばかりの知り合いでも探しているのかなと特に気
にも留めずに、今度は町というか集落だな。を見る。

視界に映るのは、竪穴式住居が四角形を形作るように建てられてい
る。そして、その4つともが、中心に入り口を向けていた。その中
心には、グロウスと同じくこの縄文時代みたいな場所とはかけ離れ
た物体があつた。その物体は、見た感じコンクリートの様な素材で、
丸い物体が1つだけ浮いていた。これが、色々な世界や、拠点へ飛
ぶ事が出来るポータルって奴だな。そして、丁度前と、後ろに門が
あり、集落を囲う様に柵が設けられていた。

まだ、ヴェスナーが来る様子がない。何をして待つていようかと考
えていると、ふと思いつく。そういえば、武器を装備していない事
に。グロウスは、思い出すと再びウィンドウを表示させアイテム一
覧を開く。

そのアイテム一覧には、木剣、木刀、木の大剣、木の弓、おもちゃ
の銃、木の杖という名前のアイテムが表示されていた。グロウスは、
その中からとりあえず木刀を選択し両手で持つ。刀は、両手が塞が
る変わり攻撃力は高いが耐久力が低い武器らしい。

一通りやっている、中央に設置しているポータルからプレイヤー
が現れた。

そいつは、銀色の鎧で全身を覆っており今は左手に兜を持ち、背中
には大きな剣が背負われている。そのプレイヤーの顔を見る。

顔は、10代後半ぐらいで活発そうな顔をしている。髪は、短髪で金。両目の色は、水色だ。そして、鎧で隠されているが体は帰宅部の癖に引き締まった体をしている。

現れたプレイヤーは、ヴェスナーだった。何だよ、めっちゃ強そうじゃないか。

その感じたままを、ヴェスナーに向かって言ってみた。

「強そうって……。これでも、まだ、レベル32なんだけどな」

始めたばかりのグロウスに、レベル32が高いのか低いのか分かるわけがない。反応に困っていると、ヴェスナーが言葉を追加した。

「今の最高レベルは、限界レベルの70だよ」

なるほど、確かに32は低いのかも知れない。でも、それなら俺はどうなるって話だよ！俺なんて1だぞ！1！ったく！70になるのにどれだけ掛かるやら分からんぞ。

「まあ、今レベルを言ったけどこのゲームじゃある程度の基準でしかないな。最高は70って言ったけど、最強は別のプレイヤーだし」

へえーそうなのかと思いつつも、でもレベルは高い方が良いよねとも思う。だが、レベル云々よりまず俺は、ゲームの説明だよ。システム関係は、ホームページで目を簡単に通したが、戦闘に関する事は通してないんだよな。え？そこまで見たなら戦闘も読めよだつて？どうせ、ヴェスナーが説明してくれると思ってさ！

「んじゃ、スキルとかの説明は後ですとしましてまずは戦闘しにいくか！」

「おう！宜しく！」

ヴェスナーが、そのまま後ろにあった扉を潜り草原のフィールドへ
と出るのをグロウスも付いていく。しばらく、草原を歩いていると
犬のような顔をしていて二足歩行をする魔物を見かける。

近づいていくと、その魔物の頭上に緑色のバーと「ドッグ・ザ・ロ
ー」という名前が表示される。

「んじゃ、まず剣とかの近接系のスキルは動きで発動させる。そし
て、遠距離系のスキルは発動したいスキルの名前を言って発動させ
るんだ」

そう説明すると、とりあえず戦って来いとヴェスナーが言う。グロ
ウスは、言われた通り戦うため、ドッグ・ザ・ローへ走り出す。

ドッグ・ザ・ローに近づくと、両手で持つ木刀を振り上げ振り下ろ
す。グロウスの攻撃が当たり、ドッグ・ザ・ローの緑色のバーが半
分ほどまでに一気に減り緑色から、黄色へと変化する。

攻撃を受けた事により、グロウスに気づき攻撃を仕掛けてくる。ド
ック・ザ・ローは右手に持つ剣を横に払ってくる。それを、グロウ
スは後ろに下がり避ける。避けると、右から後ろに回りこみ同じよ
うに横に払って攻撃する。

そして、その攻撃を食らってドッグ・ザ・ローは悲鳴を上げると体
の動きを止め、体を分散させ消滅していく。

グロウスは、こうして初めての戦闘を難なく勝利したのであった。

「ほお！ さすが、やるなあ」

グロウスの戦闘に何処か感心した様な声を出したヴェスナーは、グ
ロウスに近づいてくる。

「ま、戦闘はそんな感じで。とりあえず、始まりの集落に戻ろうか」

そう言つて、ヴェスナーは集落のあつた方角へと歩き出した。グロウスも、ヴェスナーの後ろについていきながら、やっぱ集落でよかったんだと思つた。

第1話（後書き）

えー、まだ完結していない作品があるのに書いてしまった……。何やってんだと思いつつも後悔はしていないです。

出来れば、そちらも読んで貰えると嬉しいかな。

更新ですが、不定期なので申し訳ないですがご了承ください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305z/>

Creation of Origin ~ 幻想たる魂 ~

2011年12月8日10時46分発行